

# 公開授業だより

平成29年2月3日(金) NO. 3

## ～アクティブラーニングを取り入れての授業改善～

本日のK先生の研究授業(授業公開)は、神戸親和女子大学の中植先生にお越しいただき、27名の先生方にご見学いただきました。授業ではK先生からの指示は英語で進められ、ペアワーク、グループワークを何度も取り入れながら「聞く、話す、読む、書く」の活動を重視した参加型授業でした。

放課後には英語科教員を中心とした研究協議・勉強会も開催し、中植先生から、「主体的・協働的」な学びと、その「指導→評価」について、具体的なアドバイスをいただきました。

### 科目 「コミュニケーション英語Ⅰ」・担当 K先生

2月3日(金) 2限 1-3教室 単元 「Lesson 9 Part2」

■授業の形態 「4領域言語活動」を重視した「参加型授業」

■授業のテーマ 垂直農法のメリット・デメリットを通して農業問題や人口問題・地球温暖化等の環境問題に対する解決策を考える

#### ■授業展開

- ①復習(前時に扱った語彙定着)・予習(本時の内容把握)確認小テスト
- ②前時に扱ったテーマの作文(宿題)をペアワークにて共有
- ③予習プリント内の本文要約(日本語)・語彙・内容質問の答えをグループワークにて共有・確認
- ④新出語彙音読 → ペアワークによる Read & Look up 等の活動を通して定着
- ⑤本文音読(CDを用いて)スラッシュリーディング→通し読み→虫食い読み
- ⑥本文内容まとめ 読む活動  
→ キーワードを用いての英語要約文作成
- ⑦宿題 テーマに沿った内容に関する書く活動 → 次の授業始めにペアワークにて共有



### <授業者より>

50分の授業で「読む」「聞く」「話す」「書く」の4領域の活動を統合的に取り入れ、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけさせることで、総合的に英語の力をつけることが求められているが、その評価のあり方など様々な課題もある。

将来的には六甲アイランド高校英語科としての評価基準「CAN-DO リスト」を作成し、個々の生徒を3年間でどの様な力をどのレベルまで伸ばしていくのか、生徒が自立した学習者となるための教師の役割などを検討し共通理解していく必要があると思われる。また、英語科教員間で気軽に授業を見学し、お互いの授業について意見交換ができる雰囲気作りを目指していきたい。

## <見学者の感想より>

### **授業全体** 4技能がバランスよく盛り込まれた生徒主体の授業

- ・文法と読解中心の授業を受けてきた世代にとって、今の生徒がちょっとうらやましく感じた。

### **生徒の学習活動** 読むだけでなく、「アイコンタクトを」でコミュニケーションを図る授業

- ・ペアワークの際「アイコンタクトを」という指示によく従い、読むだけでなく、紙を見ないコミュニケーションを図ろうとする姿勢ができつつあった。いい声が出ていたことが印象的であった。
- ・1年生の生徒がとてもしっかりと活動でき、素晴らしいと思った。
- ・音読の声がしっかり出て、発表には進んで挙手する生徒が多く、感心した。
- ・50分で扱う分量として多めの内容。自宅学習でしっかりと予習させ、授業に臨ませる必要あり。



### **教師の動き** 生徒に注意深く集中して聞き取らせる授業

- ・授業内で生徒にしっかりと活動させるため、年度はじめから根気強く取り組んだ成果分かった。
- ・同じ授業を担当しているのに、担当者によって同じ教材でも様々な授業ができることを実感した。
- ・50分で生徒に何をどこまで求めるか、確固たるものが確立できていない自分は、英語力の向上が必要だと痛感しました。
- ・大きな声を出さないのは?・・・「普段から同じペースでやっているで聞かなくてもわかるんだよ。」
- ・英語による指示は大きな声でなく、生徒に注意深く集中して聞き取らせる工夫を感じた。
- ・アクティブラーニングを意識した活動は、1～3年まで継続し授業に取り入れねばならない。
- ・アクティブラーニングに近づけるには、独自の教材作成が必須かもしれない。

### **改善できる部分** アクティブラーニングを意識しているが、なかなかアクティブにたどり着けない

- ・アクティブラーニングは意識しているもののなかなかアクティブにはたどり着けないのが原状のもと、今日の研究協議も参考にし、今後の授業に役立てて行きたい。
- ・教科内での共通理解が大変重要。教員間のコミュニケーションをしっかりとりながら改善したい。
- ・生徒をいかに動かし、かつ授業内容を理解させるかが今後の課題。

今日の授業のように静かな落ち着いたムードのなかで、秩序あるペアワーク、グループワークができる授業が成立するのは、普段からの徹底した指導（しつけ）が前提であろう。もちろん、各活動のねらいを生徒自信にも納得させねばならない。ここまでにかかりの手間と時間と試行錯誤が必要だが、成果として真の学力が望めるならばやらねばならない。・・・とはいうものの、なかなかイメージがわからないのが正直なところです。今回は、英語科の先生方が集まったの研究協議が開かれ、中植先生からも具体的なお話をいただきました。この会でのお話の紹介は、また次号以降といたします。（教頭）

